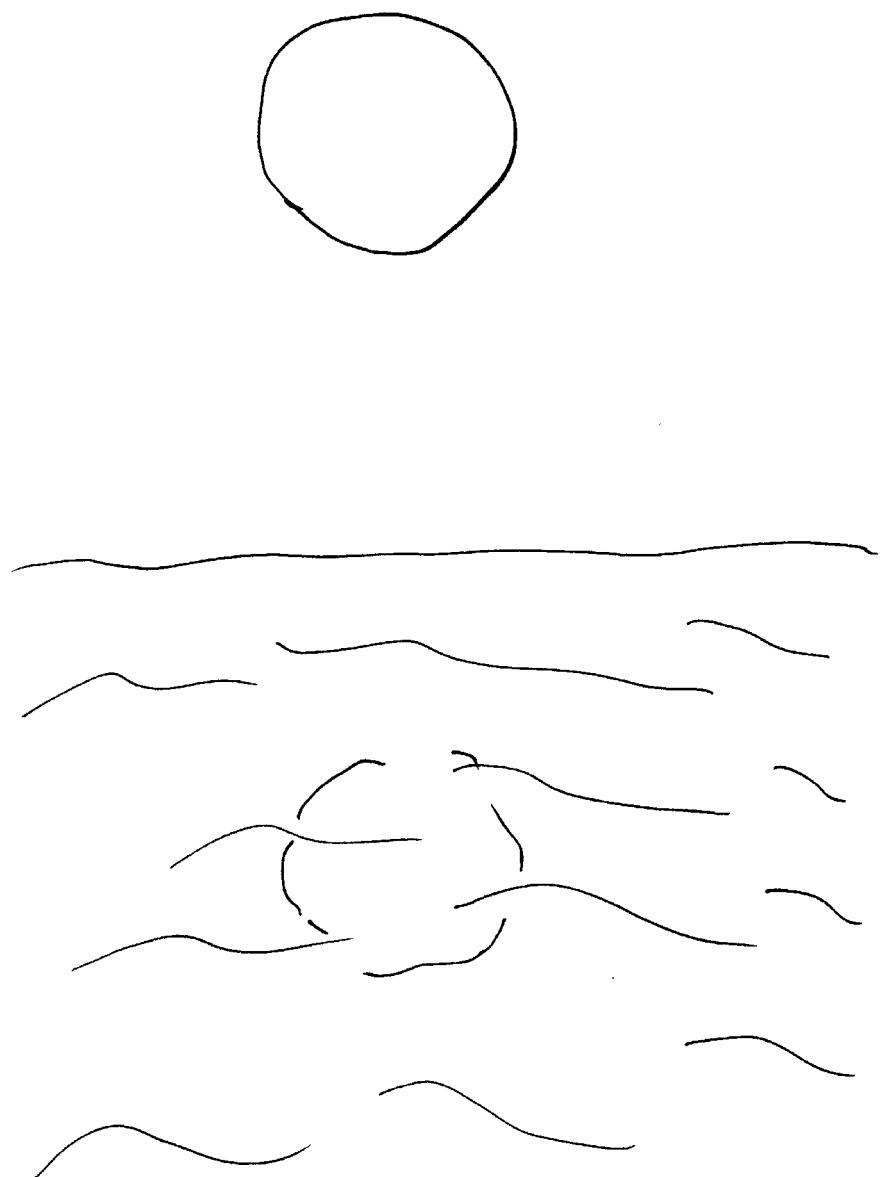
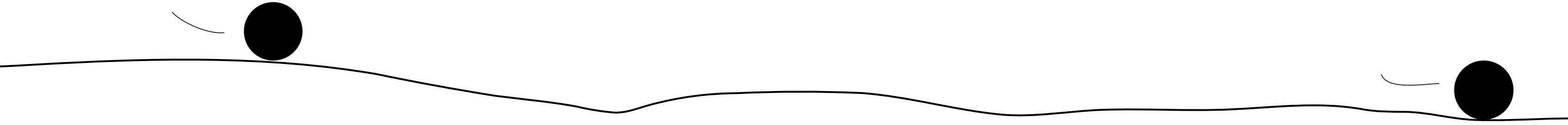


たまたま、



6 「ぶらぶら」



今もグラグラ帰る話 ひだか もと

僕は中学生のとき、帰宅部だった。帰宅部仲間には「エ教室」のために帰宅部だ、た。高見さんがいた。高見さんはバトニーもや、こいたし。僕の家の近くのピアノ教室にも通、こいた。すごい品のある人だ、た。もう一人下宮くんは勉強のための帰宅部だ、た。すじく身長が「でたくて、一緒にレーリーを打ると中学生は知らな」「よ」な単語を使、こいるのび、イライラした。水筒の甲に特殊なお茶を入れて、いた。グラグラと三つで帰、こいたけれど、不思議な組み合せだ、たと思う。僕だけは大した理由もなしに帰宅をしていた。解散はともかくスムーズだ、た。あの三年間のおかげで、今も僕は帰宅する「がすき」だ。高見さんも下宮くんもへラビ、で何をしこころか分からぬけれど、帰宅は続けて、「はすだ」。





運動不足解消と薄着になって自分の体が気になってきたために、ストレッチや筋トレをはじめた。

これまで筋トレの必要性があまりわからなくて、やろうと思ったことがなかったのだけど、こうも家に引きこもって同じ姿勢で居続けると、「筋トレ」が頭にちらついてくる。動き方を検索し、こんな動きがあるのねと知るだけで満足する積読ならぬ積動（つんうご）からわたしの筋トレは始まる。

わたしはダンサーではないのだが、ダンスを見るのが好きだ。踊るのも好きだけど、ダンサーとは名乗り難い。踊れる体を作るために体を鍛えるのは間違いで、踊るうちにつく筋肉のなかで体の輪郭も踊りの形も決めていけばいい。（そういう踊りにこそ興味がある。）体づくりのための筋トレにあまり興味が向かなかったのは練習嫌いのためかもしれない。アスリートであれば競技のための体づくりのための筋トレであるが、わたしの場合は何の目的もなく「身体のために→身体を動かすことが→身体のためになるー」というように、筋トレは閉じた円環の中にある。筋トレは何のためでもなく、筋トレは筋トレのためにある。これは練習にはあたらない。やってもいいかと思える。でもなにか気が進まない。

「内向き」な運動である筋トレに対して、サッカーやバスケの中の、「フェイント」は外向きな気がする。明確な相手にむけた振る舞いが込められている。そういえばテニスは振る舞いのスポーツだと言われている。わたしはテニスをしたことはないが、試合を見ると相手の振る舞いを引き出すために自分の身体を使っているように見える。これも外向き。のような気がする。動かした体に別の目的が連なっている。

かなり脱線した。コロナ以前、行動を選択するときには自分を含めた複合的な要素に巻き込まれエコーするようにして生活してきたのを、家の中ではほとんどすべてのことを自分で決定して動かないとなにも動かない。エコーしたい。同居人はわたしのそんな魂胆に気が付いて、わたしに悟られないように散歩へ行ったり買い物したりしている。わたしはいつも切り替えられないで考えごとと昼寝をやめられない。時間割を決めて動かないといけないのが辛いけれどそうしないとなにもできなくなってしまうので自分に鞭打ってエクセルを叩く（わたしは自分のタスク管理をエクセルでやっている。）。

自分で数を数えて上下運動しないといけないような筋トレをあまりする気にならないのは、普段の生活のタスクの多さに嫌気がさしているからだろうか。そんな中で手足をブラブラさせる筋トレは、寝転がって手足をあげていれば成立する受動的な運動で、わたしにはこれが心地よいのだ。重力と身体のやりとりに対して、わたしはうまくブラブラできているかだけ気にしていればそれでいいのだから。





僕が電話した相手

僕は実家から一人暮らしの家へ帰るまでのいろいろを考えていた。

何を持って行って、何を置いていくかを。

考えている間、みそ汁のお椀に卵を一つと、牛乳を垂らしてかき混ぜ、パンにひたした。その日の気分で、牛乳を多く入れてしまうこともある。弱火で2,3分ほつておいてひっくり返す。出来上がったハニートーストにハチミツを数滴垂らして、マグカップに牛乳を注いだ。

ぼんやりとした明度の低い雲と紫の長袖のTシャツを着た。あたりはいつものようく小鳥が泣き、二階の窓辺に置いてある貝殻の吊るし飾りが擦れ合う音がする。まるで風としゃべってるみたいに。トンちゃんは声を響かせ、孤独に何かをうつしていた。

その電話が鳴ったのは、13時を回る前だった。僕は、午後の1時に電話をかける奴の気がしないし、何よりもフレンチトーストを食べようとしていたものだから、鳴らしちゃなしにした。その電話は8回ベルを鳴らした後切れた。実家の電話だから、僕への電話ではないだろうとも思った。

フレンチトーストを2切れ食べた後またベルが鳴った。僕は数えて3回目のベルで受話器をとった。「はい」と僕が言うと、何も返事はなかった。

その上、その受話器の先には完璧なまでの無音が孕んでいた。鳥の声も、貝殻の擦れ合う音もしなかった。僕の言葉が底へ向かう少しの間の後、受話器を戻す音がして切れた。

行き場のない僕の「はい」はその後、僕の脳裏に返ってきた。その声は死人のように低かった。

テーブルに戻って、牛乳を飲んだ。冷たい甘さがまだ残っていた。まだ冷えていたのだ。冷たい牛乳ってなんでこんなうまいんだって思ったのもつかの間、また受話器が鳴った。僕は7回目に出ることにして、数え始めた。

1.2.3.4.5.6...

僕が出ると同時に相手は切れた。またそれと同時に何かが僕の中で確実に切れた。僕の中にあったそれはピアノの弦のようなものではなく、ニュートラルグレーの垂れている糸だった。ハサミで切られたわけでもなく、老化で切れたわけでもなかつた。ただ、切れたのだ。黒ねこが去るみたいにね。

スダタカヤ



タ イ ト ル 週刊たまたま、# 6「ぶらぶら」

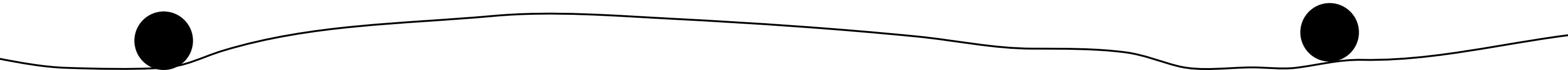
参 加 者 ひだかもと、鈴木玲美、うらあやか、近藤亜美、下山健太郎、スダタカヤ

発 行 日 2020/5/26

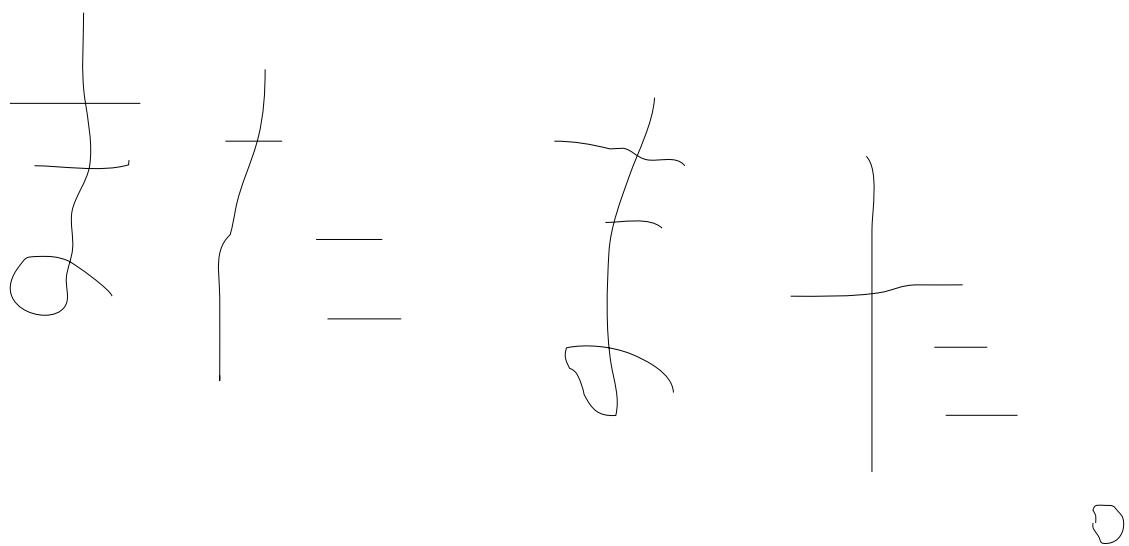
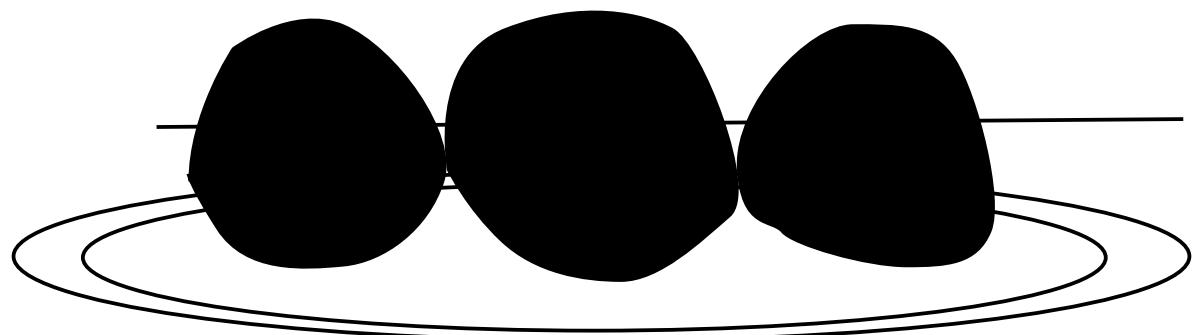
発 行 東京造形大学 CS-lab

〒192-0992 東京都八王子市宇津貫町1556

編 集 下山健太郎



編集後記：スッと立っている状態から足を肩幅に開いて膝を軽く曲げ、手をフワッと開いてぶらぶら、腕の付け根からぶらぶら。体の力は抜いて。その後は腕をクルクル回す。一天功夫俱楽部の最初のストレッチです。指の先、毛細血管まで血が巡って気持ち良いんだ。気功の一種なんだとか。（つづく）



CSLAB
CREATIVE SPIRAL
LABORATORY